

研究ノート—プロティノスにおける「われわれ」(ἡμεῖς)の意味するもの—

田子 多津子

はじめに

「私はしばしば身体を脱して私自身に(*eis eautou*)目覚め、他のすべてのものから脱却して私自身の内部へとはいりこみ(*enutoi elos*)、ただただ驚嘆すべき素晴らしい美を観ることがある……」(IV, 8, 1, 1-3)⁽¹⁾。これは、「魂の身体への降下について」という表題の付されている『エンネアデス』IV、8第一章において、プロティノスが究極の根源である「一なるもの」へと向かう自己の上昇体験を叙述している部分の冒頭の一節である。ここでは、「一なるもの」への上昇と合一の過程がプロティノス自身の内への転向と深化の過程と重ね合わされている。ここからプロティノスの場合、「一なるもの」の探究のなされる場が自己の内面であり、探究の端緒には「自己とは何か」という問いがあることとみることができ。しかしこの問いは、単に探究の発端となっただけではない。「一なるもの」の探究が自己の内への深化の過程としてとらえられる以上、「自己とは何か」という問いは、プロティノスにとつて、探究の発端であるとともに、それを問い続けること自体が「一なるもの」との合一というテロスを目指すことを意味していた。『エンネアデス』中二番目に著されたとされるIV、7(「魂の不死について」)においてすでに「人間そのものとはどのような本性をもつか」という形でこの問いが提示され(IV, 7, 2, 1)、五三番目で最晩年の論文とされるI、1(「生命あるものとは何か、人間とは何か」)では、以下にみるように「生き物としての人間」と「真の人間」との区別に基づいて、「自己とは何か」が主題とされており、プロティノスはこの問題を様々な観点から一貫して問い続けたとみることができ。「自己」の概念がプロティノスの思想において

重要な役割を担っていることは多くの研究者によつて指摘されており、彼の思想を考察しようとする場合、彼において探究の対象としての「自己」がどのようにとらえられているかを明らかにする必要があるであろう。

ところで「自己」に言及する場合、プロテイノスはそのような言葉を用いているのであろうか。近代的な自己意識の概念からすれば、それはただちに「私」なり「エゴ」といった言葉に置換されるであろう。しかしプロテイノスにおいては「自己とは何か」という問いは、「私とは何か」という形では展開されない。たしかに冒頭にふれたIV、8第一章では、ἑαυτοῦςという一人称単数形の再帰代名詞が用いられているが、これは実は、『エンネアデス』全体の論述のなかでは例外的な表現である。³ また『エンネアデス』においては、「私」(ἐγώ)という語が約二〇箇所で見られているが、「自己とは何か」という問いと関連して用いられている例は一箇所もない。⁴ 「自己とは何か」と問う場合プロテイノスは、「私」ではなくあえて「われわれ」(ἡμεῖς)という複数形をしばしば用いているのである。なぜ彼は、「われわれ」という語を用いているのであろうか。その一つの理由としては、ポルフュリオスによつて〈*ἑνωσις*〉(Vita Plotini, 13.1)という語で表されている探究の共同の場の存在を挙げることでできよう。しかしそののみならず、『エンネアデス』においては、以下にみるように「われわれ」という語が「人間」(ἄνθρωπος)、「魂」(ψυχή)という語と関連づけて用いられており、自己探究との関連において「われわれ」という語には特別の意味が付与されているように思われる。「われわれ」という語の使用は、プロテイノスにおいて個性あるいは個物のアイデアがどのようにとらえられているかという観点からも考察されるべき問題であるが、本稿では、自己探究の局面においてどのような意味で「われわれ」が用いられているのかという問題に焦点を絞り、「われわれ」の意味を明らかにしたい。そのためにまず、『エンネアデス』I、1第一〇章に示されている「われわれ」の二様の意味を端緒として、それと関連する〈*ἡμεῖς*〉の用例を手がかりに考察を進めることにする。

一 「われわれ」の二様の意味

プロテイノスは、われわれ人間は魂と身体からなる複合体であるという点においても、また欲望や感情をもち、感覚や思考といった様々な働きをなすという点においても多様なものであるととらえ、「全体としての人間は多くの要素からなり」(I, 1, 7, 8)、「われわれは多(πολλά)

である」と述べている(ibid., 9, 7)。そのような人間の多様なあり方を魂と身体とのかかわりという視点から凝縮した形で表しているのが、I、1第一〇章において提示される「われわれ」(ψυλῆς)の二様の意味だと考えられる。彼によれば、「われわれ」には二様の意味がある(I, 1, 10, 5 sqd.)。一つは、「獣が加算された状態」における「われわれ」である(便宜上これを「われわれ」①と表記する)。ここでは「獣」とは生命を与えられた身体だと言われており、「われわれ」は一面において魂と身体からなる複合体とみなされている。この意味での「われわれ」①には身体と密接にかかわる魂の働きである感覚や欲望や、身体を通して魂が受ける様々な情態も含まれており、「われわれ」①とは日常的経験的なレベルにおける自己をさす。いま一つは、そうした生き物としての「われわれ」①を超えた「われわれ」であり、それは「この世にありながら身体から分離しうる魂(ψυλῆς) καρστικῆς ψυχῆς」と言い換えられている(これを「われわれ」②と表記する)。プロティノスによれば、この「われわれ」②こそが「真の人間」(ὁ ἀληθὺς ἀνθρώπος, ibid., 7)なのであり、これはさらに「内なる人間」(ὁ εὖδον ἀνθρώπος, ibid., 15)とも言われている⁽⁵⁾。この「真の人間」としての「われわれ」②はV、1「10」(「三つの原理的なものについて」第一〇章において「三つの原理的なものがわれわれのもとにもある」(τρίτα παρ' ἡμῶν))と言われる場合の「われわれ」と重なると考えられる。なぜなら、プロティノスはそこにおいて、この場合の「われわれ」とは、感覚にかかわるわれわれではなく、感覚の外(ἐξῆς)にあるわれわれであり、身体と混じり合うことなく分離するもの(καρστικῶν)であって、さらにそれはプラトンの言う「内なる人間」に相当する人間の一面であると述べているからである(V, 1, 10, 5-10)。

このようにみると、このI、1第一〇章の叙述から「われわれ」、「人間」、「魂」について、魂と身体との複合体としての「われわれ」①＝生き物としての人間、「われわれ」②＝「真の人間」あるいは「内なる人間」＝「身体から分離しうる魂」という関係が浮かび上がってくる。「われわれ」のこうした二様の意味をふまえて、IV、8第一章冒頭の体験の叙述をもう一度ふりかえってみるならば、そこにおける「私自身への目覚め」とは、魂と身体との複合体としての「われわれ」①が「真の人間」と言える状態にないことに気づくことをさし、I、1第一〇章における「われわれ」①が単なる生き物の状態から脱して自己の内へと入り込み、「われわれ」②つまり「真の人間」になろうとする過程を述べているとみることができる。したがって、IV、8第一章にみられる「私自身」とは、I、1第一〇章の「真の人間」としての「われわれ」②を意味すると言えよう。そして先にふれたV、1第一〇章の「われわれのもとにも三つの原理的なものがある」という叙述からしても、この「われわれ」

②においてこそ「一なるもの」の探究がなされねばならない。

人間を魂と身体からなる複合体ととらえ、魂こそが真の人間であるとみなすことは、プロティノスの一貫した観点である。プロティノスは先にふれたIV、7の第一章において、人間を魂と身体からなるものとみなし、さらに魂と身体との関係を道具の使用者と道具との関係になぞらえ、身体を支配する魂こそが「人間そのもの」(αυτός ο ἀνθρώπος, IV, 7, 1, 22-23)であると述べている^⑥。そしてここでも「われわれ」(ἡμεῖς)という語は身体とは区別される魂を表すために用いられており、「人間そのもの」と同義と解釈することができる^⑦。その根底には、プラトンの『アルキビアデス』Iにみられる「人間とは身体を使用する魂である」(129e-130a)という定義、あるいは『国家』第九巻(592a)の人間全体を支配する「内なる人間」という発想があると思われる。

しかし、人間が魂と身体からなる複合体であり、魂こそが「われわれ」であり「真の人間」であるとみなすとしても、現に生きる人間において魂と身体とは截然と区別されるわけではない。じつさいI、1においては、欲望や苦痛といったものが人間のどの部分に属するののかという問いが考察の端緒として掲げられており、プロティノスはそれが決して身体のみにかかわるものではなく、魂と身体からなる「生き物」がそうした状態をもつと述べ(1, 4, 27)、われわれが経験する様々な情態の座を「生き物」つまり先の「われわれ」①に求めている。プロティノスには、日常的レベルにおいては魂と身体は密接に関連し、区別しがたいという強い自覚があったと言えよう。では生き物としての人間とは異なる「真の人間」はどこに求められるのか。たしかにプロティノスは、魂こそが「真の人間」としての「われわれ」である^⑧とみなしてはいるが、単純に魂と「真の人間」とを同一視しているわけではない。先にみたように第一〇章においては魂に「身体から分離しうる」(χωριστός)という限定が付されており、またV、1第一〇章の叙述からもわかるように、われわれの魂において身体にかかわる部分と身体から分離しうる部分とが区別され、いわば魂が重層的にとらえられている^⑨。自己つまり「真の人間」としての「われわれ」(『身体から分離しうる魂』)に目覚めることは、たしかに「一なるもの」への上昇の端緒ではあるが、それはただちに「一なるもの」との合一につながるわけではなく、まず魂の重層的なありように思いをめぐらし、「われわれ」の意味をさらに問い直す契機となるであろう。自己自身への覚醒からさらに自己の内面へと深化することが求められているのである。

では、「身体から分離しうる魂」とは魂のどのようなありようをさしているのであろうか。

二 「われわれ」と「われわれのもの」

プロティノスは魂について『エンネアデス』中の様々な箇所而言及しているが、「真の人間」としての「われわれ」との関連において注目されるのは、Ⅲ、4「15」(「われわれを割り当てられた守護霊について」第二、三章の人間を人間たらしめる魂の能力についての叙述である。そこでプロティノスは、「魂は時により姿を変えながら、宇宙をくまなく駆けめぐる」というプラトンの言葉(『パイドロス』285d)を引用し、この言葉は、宇宙において魂が植物的(*φυτική*)、感覚的(*αἰσθητική*)、理性的(*λογική*)といった様々な姿をとって現れることを意味すると解釈している(Ⅲ、4、2、15sq.)。たとえば植物であれば、魂の植物的部分が支配権を握っており、他の感覚的部分や理性的部分は何の働きもしていないがゆえに、植物は植物として存在するのである。つまり魂のどの部分が支配権をもつかによって、生き物としてのあり方が異なることになる。ただし人間の場合は、プロティノスによれば、支配権をもたない劣った部分もそれぞれ特定の役割を担って働いている。つまり人間は、感覚器官をもち、また成長し生殖する身体をもつ生き物であるという意味において、感覚能力をもつ存在すなわち動物としても、また植物としても生きているということになる。

では、どのように様々な能力をもつ人間が、なぜ動物でも植物でもなく人間としてあるのだろうか。これについてプロティノスは、人間は魂の優れた部分、つまり理性的部分のゆえに、動物としても植物としても生きてはいるが、生き物全体としての姿は人間なのだと述べる(Ⅲ、4、2、10-11)。したがって、前節でみた「真の人間」としての「われわれ」つまり「身体から分離しうる魂」とは魂のこの理性的部分をさしていると言えよう。生き物としての人間においては上述のすべての部分が共に働いているが、人間を人間たらしめているのは魂の理性的な部分であり、それが支配的な役割をはたすことよって人間は人間として存在するのである。逆に言えば、人間においては魂の劣った部分もそれぞれ働いているがゆえに、魂の優れた理性的部分が支配的な役割を果たさなければ、人間でありながら、動物や植物に等しい生を送る可能性もあるということになる。この点で、われわれ人間は様々な次元において生きうるものであり、しかもどの次元において生きるかについての、いわば「位置決定の力」はわれわれ自身に帰されているとみることができ、これは後にふれる「われわれ」の中間的な位置づけともかかわると思われる。

それゆえプロティノスによれば、魂は多 (πολλά) でありすべて (πάντα) なのである(III, 4, 3, 21)。すなわち魂は、上位のものであるとも下に位のものでもあり、生命全体に及んでいる。人間は、下位の部分においてはこの可感的世界と結びついているが、上位の部分においては可感的世界と結びついていると言われている(Ibid., 3, 23-24)。成長や生殖にかかわる部分や感覚器官の働きに関する限り、魂は身体と不可分の関係にあり、その点では可感的世界のうちにあると言つてよい。しかし魂の働きには身体と直接にはかかわらない理性的働きも含まれており、先にみたようにこれが支配的な役割を果たすことで人間を人間たらしめているのである。このようにみると、人間の魂は、それ自体のうちに宇宙全体のうちに見いだされる上位の生命のあり方から下位の生命のあり方までを含み込んでおり、いわばある広がりをも有する重層的なものと言えよう。それゆえ魂は、前節でふれた二様の意味での「われわれ」、つまり生き物としての「われわれ」と「真の人間」としての「われわれ」の両者を成立させていることになる。そのような魂において、「真の人間」としての「われわれ」、(＝「身体から分離しうる魂」とは、先に述べたように、人間を人間たらしめる「優れた部分」、つまり魂のこの理性的な部分をさすと考えられる。

そして、このように魂の多様な働きのなかで理性的な部分こそが「真の人間」としての「われわれ」であることを、プロティノスはI、1第七章において、人間の魂の働きのうちに「われわれ」(ἡμεῖς)と「われわれのもの」(ἡμετέα)とを区別することによつてより明確にしている(I, 1, 7, 17sq.)。彼によれば、思考や思いなしや直知の働きにおいてこそわれわれは何にもまして「われわれ」なのであり、これらの働きより下位のものは「われわれ」ではなく、「われわれのもの」ではない。つまり魂の非理性的部分は「真の人間」としての「われわれ」にとつて非本来的なものであるという意味で「われわれのもの」と言われ、「われわれ」から区別されているのである。

こうした「われわれのもの」に対し、プロティノスは、「人間は思惟する魂(νοῦς) 人間(ψυχή)と一致する」と述べ(Ibid., 21-22) 先にみたように「真の人間」としての「われわれ」が魂の理性的部分であることを強調している。だが、さらに同じ箇所ではプロティノスは、「われわれ」とは「ここから上方にのびている部分である(τὸ ἐντεθεν αὐτῶν ἐκτείνοντες)」(I, 1, 7, 17-18)とも言っている。この場合の「ここ」が魂の理性的部分をさしていることからすれば、「真の人間」としての「われわれ」とは魂の理性的な部分をさすのみならず、さらにその上位のヌースにまで及ぶものとしてとらえられることにならう。こうした見方は、魂の一部が可感的世界にとどまっているという見解とも密接にかか

わると思われる。また先にふれたV、1第一〇章のわれわれのもとにも三つの原理的なものがあるという叙述にみられるように、彼はわれわれのうちにもヌースが見いだされると考えている。すると「真の人間」としての「われわれ」はヌースでもあるということになるのであるうか。しかしプロティノスは、「真の人間」としての「われわれ」つまり魂の理性的部分がヌースである、と述べてはいない。

では、「真の人間」としての「われわれ」が上方にのびているということをどのように解釈すればよいのであろうか。この点について注目されるのが、プロティノスがI、1において「われわれ」におけるヌースの活動を「われわれに属する」(ἵκνω)とみなし(I, 1, 13, 5)、また次にみるように、V、3においてヌースに対し「われわれのもの」という表現を用いて「われわれ」とは区別している点である。先にみたように、「われわれのもの」という表現は、「真の人間」としての「われわれ」にとつて非本来的なものである魂の下位の部分、つまり非理性的な部分を表すために用いられている。しかし、それと同一の意味でヌースに対して「われわれのもの」という表現が用いられているとは考えられない。むしろプロティノスは、「われわれのもの」という表現を二義的に用いることによつて、「真の人間」としての「われわれ」と魂の非理性的な部分との関係のみならず、「われわれ」とヌースとの関係をも表そうとしているように思われる。「われわれのもの」という表現はどのような意図のもとにヌースに対して用いられているのであろうか。

I、1と同じく晩年に著されたとされ、自己認識の問題を論じているV、3[49]（「認識する諸存在とそのかなたのものについて」）の第三章においてプロティノスは、「われわれのもの」(ἡμετέρας)という表現を用いてヌースに言及してはいる。ただし、この場合彼は、ヌースは「われわれのもの」ではあるが、魂の理性的部分(τὸ δαιμονικόν)とは別のものであり、より上方に位置するのであつて、それを魂の諸部分のうちには数え入れない、と述べている(V, 3, 3, 24-26)。それに対し、推論的思考をなす部分つまり魂の理性的部分こそが「われわれ」なのであり(V, 3, 3, 35-36)、その働きはヌースのなす直知の働きとは別である。こうした叙述からすれば、「われわれ」(＝魂の理性的部分)とヌースとは明らかに区別されている。しかし「われわれのもの」と言われる以上、「われわれ」は自己の内にかの仕方でヌースを所有しており、その限りにおいてヌースは「われわれ」からまったく分離されているわけではない。だが同じように「われわれのもの」と言われている感覚の働きを「われわれ」が常に用いているとは異なり、「われわれ」はいつもヌースに即して活動しているわけではなく、常にヌースを用いているとは言えない。つまり「真の人間」としての「われわれ」(＝魂の理性的部分)が上方にあるヌースに気づかなければ、ヌースは「われわれのもの」

でありながら、「われわれのもの」ではないということになるのである(ibid., 26-27; cf. V, 1, 12, 1-3)。そうした魂の理性的部分とヌースとの関係を、プロティノスは「われわれ」と「われわれのもの」という表現を用いて表していると考えられる。

したがってプロティノスによれば、「われわれ」とは魂の指導的部分(τὸ κεντρικὸν τῆς ψυχῆς)であつて、より優れた力であるヌースとより劣つた力である感覚の働きの中間に(μεσον)位置づけられる(V, 3, 3, 37-40; cf. I, 1, 11, 3-4)。このことからして、「真の人間」としての「われわれ」は、二様の意味での「われわれのもの」、すなわち上方の「われわれのもの」であるヌースと下方の「われわれのもの」である魂の非理性的部分との間に位置づけられると言えよう。そして、上方の「われわれのもの」と言われるヌースを現に「われわれのもの」とするためには、中間のものである「われわれ」が上方に向かなければならないとされているのである(I, 1, 11, 5-8)。

なぜプロティノスは「われわれのもの」という表現を二義的に用いているのであろうか。上述のことからみると、「われわれのもの」という表現がヌースに対して用いられているのは、一面においてヌースを「われわれ」の上位に位置するものとして「われわれ」とは区別しつつ、他面「われわれ」がそれを現に「われわれのもの」として働かせうることを示す、という意図に基づいていると思われる。その場合、ヌースを現に「われわれのもの」とするということは、たとえばそれを道具のように用いるというような意味ではなく、むしろ「われわれ」がヌースに即して活動することによって、可知的世界へと上昇することを意味するのではないだろうか。というのも、I, 1 第一三章においては、ヌースは「われわれ」の部分であつて、「われわれ」はその向かつて上昇していくと言われているからである(ibid., 13, 7-8)。その意味において、「われわれ」はいわば上方に向かつて開かれていると言えよう。その際、ヌースを現に「われわれのもの」とするか否かは「われわれ」にかかつている。言い換えれば、「真の人間」としての「われわれ」は可知的世界と可感的世界の中間にあつて、どちらにも向かいうる不確かな存在ということになる。プロティノスが人間について「中間」に関連する言葉をしばしば用いるのは、こうした「われわれ」のありようを意識しているからだと考えられる。

そして最後に注目しておきたいのは、これまでみてきたような「われわれ」についての考察の過程の最後において、プロティノスがあらためて考察の主体を問い直し、「魂である限りのわれわれ」が考察してきたのだと確認し(I, 1, 13, 1-3)、そのうえでさらに「われわれ」はヌースに向かつて上昇すると述べている点である(ibid., 13, 7-8)。このことは、自己探究の過程が単に直線的に深化・上昇する過程ではなく、探究の

主体でもあり対象でもある「われわれ」の意味を繰り返し返し問い直し、いわば螺旋状に深化・上昇することによって、「一なるもの」へと近接していく過程であることを示唆しているともみることができるのではないだろうか。

以上みてきたように、「われわれ」(we)という語は、自己探究との関連において、魂と身体との複合体としての「われわれ」と「真の人間」としての「われわれ」という二様の意味で用いられている。自己探究の場面において問題となるのは、この後者の意味での「われわれ」であり、それは魂の理性的部分と等置されているとみることができる。しかし、この「真の人間」としての「われわれ」は魂の何か閉じられた領域をさすわけではない。上述のようにプロティノスは、さらにこの「われわれ」と対比させて「われわれのもの」という表現を二義的に用いることによって、つまり「真の人間」としての「われわれ」より下位の魂の非理性的部分と上位のヌースの双方に対して「われわれのもの」という表現をあえて用いることによって、「われわれ」が可感的世界と可知的世界との中間に位置することを示すと共に、「われわれ」が自己のうちにヌースを所有し、自己の内に深化することによって、上方へと開かれていく可能性をもつことを示そうとされていると考えられる。だが、こうした「われわれ」のありようの認識は、自己探究の出発点にすぎない。プロティノスは、「真の人間」としての「われわれ」と可知的世界にとどまっていると言われる魂の部分とがどのように関係するのか、それとヌースとはどのように区別されるのか、といった点についてきわめて曖昧な叙述しかしておらず、プロティノスにおける「自己」の意味を明らかにするためには、これらの問題をあらためて考察しなければならない。

〈注〉

- (1) 『エンネアデス』のテキストは Oxford Classical Texts 所収の Henry-Schwyzler 版を使用した。訳語については、『プロティノス全集』(田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦訳、中央公論社、昭和六一(一九三六)年)を参照した。
- (2) cf. O'Daly, G., *Plotinus' Philosophy of the Self*, Shannon 1973, pp. 4-5. *Μητις* Brehier, Harder 等、主な研究者のこの点についての指摘が列挙されている。
- (3) 他に一箇所 *εναρτός* という語が用いられているが(V, 9, 5, 31) これはヘラクレイトスからの引用である。
- (4) cf. Sleeman, J. H. & Pollet, G., *Lexicon Plotinianum*, Leiden 1980, s. v. III, 7, 12, 38-39 *εἶδος* *εἴωον* という表現がみられるが、この *εἴωον* は擬人化された時間を示す。
- (5) 同様の見解は II, 3 [48] (「星は(地上の出来事を)引き起こすかどうかについて」第九章にもみられる。ここでも「われわれ」とは何かが問題と

され、各人は二重のものであり、その一方は魂の痕跡(τυξῆς, ἕξις)と身体との合体したものであり、もう一方は自己自身(αὐτός)であると言われてゐる(II, 3, 9, 30-31)。

(6) cf. Harder, R., *Plotinus Schriften*, Bd. I b, Hamburg 1956, S. 387, „ἡμεῖν: terminologisch 'der Mensch'“.

(7) cf. IV, 4, 18, 14-15.

(8) I, 1 第七章では、プロティノスは、魂自体が身体とかかわるといふ表現を避け、魂自体ではなくそれから発する光のようなものを身体に与え、魂自体とは別の生き物を作ると述べている。そこには魂の自体的な実体性を保とうとする彼の意図が働いているように思われる。注(4)でふれた「魂の痕跡」といふ表現もこれと同様の意図によると思われる。

(9) cf. W. Himmerich, *Endamonia: die Lehre des Plotinus von der Selbstverwirklichung des Menschen*, Würzburg 1959, S. 95.

(10) cf. IV, 8, 4, 30-31; *ibid.*, 8, 2-3.

(11) cf. I, 2, 4, 13; III, 2, 9, 20; IV, 8, 4, 32; *ibid.*, 7, 5. この点に「根源への還帰の契機としての人間の自由意志の問題もかかわってくるであろう。還帰の側面における自由意志の契機については拙稿「プロティノスにおける必然と自由意志——魂の降下——の問題をめぐって」(『哲学・思想論集』第一六号、平成三年、七五—九二頁)参照。

A Note on the Meaning of “we” ($\xi\mu\epsilon\iota\varsigma$) in Plotinus’ Thought

Tazuko TAGO

哲学・思想論集第十八号

The concept of “self” plays an important part in Plotinus’ thought. In *Enneads*, especially, Plotinus uses the word “we” ($\xi\mu\epsilon\iota\varsigma$) for this concept. The purpose of this paper is to investigate the meaning of “we” in his thought.

According to Plotinus (*Enn.* I, 1, 10), “we” is used in two senses. The one is “we” as the combination of soul and body in other words the living being and the other is “we” as the true man (or the man within). The true man transcends “we” as the living being and it is said that it is the separable part of the soul from the body. What this separable part of the soul from the body actually mean? Plotinus thinks that a man lives both as a plant (the power of growth) and as an animal because of having sense-perception, but he lives as a man in virtue of his rational sphere (its faculty is reasoning). Accordingly, “we” as the true man means the rational part of our soul. It, however, does not indicate something as a closed part of the soul. Then we must also pay attention to the word “ours” ($\xi\mu\acute{\epsilon}\tau\epsilon\rho\varsigma$) when used coincidingly with “we”. “Ours” means both the lower irrational part of the soul and intellect placed higher than “we”. “We” as the true man is placed between these two senses of “ours”, and “we” can incline towards either of these directions, but the direction chosen depends on the “we” as the true man. Therefore, “we” means the rational part of soul, and it has the possibility to transcend “ourselves” and ascend the level of the intellect.

一六三